

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 3 日現在

機関番号：12501  
研究種目：基盤研究(C)（一般）  
研究期間：2014～2016  
課題番号：26370849  
研究課題名（和文）古典期のマケドニア王国の発展に関する研究：フィリポス2世のギリシア制覇を中心に

研究課題名（英文）A Study on the Development of Macedonia during the Classical Period

研究代表者  
澤田 典子（SAWADA, NORIKO）  
千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：50311650  
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、フィリポス2世のもとでのマケドニアの急速な台頭とギリシア制覇の過程を、彼が精力的に進めた軍制改革・都市建設・人口移動・農地開拓などによるマケドニアの社会の変容と関連づけて分析し、こうした社会変容がフィリポス2世のギリシア制覇の重要な背景になっていたことを明らかにした。さらに、そうしたフィリポス2世の治世のマケドニアの発展において、前5世紀初頭以降のマケドニア王たち、とりわけペルディッカス3世の治世からの「連続性」が従来考えられているよりも顕著であったことを検証した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have analyzed some aspects of the rapid growth of Macedonian power and the conquest of Greece during the reign of Philip II, with emphasis on the social transformation in Macedonia brought by his military reforms, urbanization, translocation of populations, and land reclamation. Philip II changed Macedonia in terms of its wealth, military manpower, urbanization, and centralization. His social reforms were the key to his successful conquest of Greece. In evaluating the development of Macedonia under Philip II, the continuity of his reign with those of previous Macedonian kings, especially with that of Perdiccas III, should not be neglected.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：マケドニア ギリシア フィリポス2世 ペルディッカス3世 アレクサンドロス

## 1. 研究開始当初の背景

この数十年、欧米ではマケドニア史研究がこれまでにない活況を呈しており、とりわけフィリポス2世(在位:前360/59~336年)に関する研究が著しい進展を見せている。その背景として、マケドニア考古学が1970年代以降着実な発展を遂げていることが挙げられるが、とりわけ21世紀に入って、アイガイの宮殿やアゴラの発掘調査をはじめとする注目すべき成果があがっており、古典期のマケドニアの文化内容を考古学的に解明することを可能とする材料が蓄積されている。こうして、従来はアレクサンドロスに圧倒的な比重が置かれていたマケドニア史研究は大きな転換を遂げ、今やフィリポス2世研究は欧米の西洋古代史研究の中心的なテーマの一つとなっている。しかし、そうした近年のフィリポス2世研究においては、彼のギリシア制覇におけるアテナイの中心的役割を認めようとするアテナイ中心主義的な傾向が顕著に見られ、こうした傾向を批判する動きはあるものの、いまだアテナイ中心主義を脱却していないのが現状である。さらにまた、フィリポス2世の功績に注目するあまり、マケドニア史の「連続性」という視点がいまだ欠落している。フィリポス2世が前王たちから何を「継承」し、どのような影響を受けたのか、マケドニア史のなかにフィリポス2世はいかに位置づけられるのか、という問題関心は不十分であり、また、彼のギリシア制覇を可能にしたマケドニアの社会的条件にも十分な関心が払われていない。これまで看過されてきたマケドニア史の「連続性」という視点に立ち、前5世紀初頭以降のマケドニア王国の発展とギリシア世界との緊密な関係の延長線上において、王国の台頭とフィリポス2世のギリシア制覇の諸相を、マケドニア社会の変容の解明を一つの軸としつつ、多角的に考察することが肝要となる。

## 2. 研究の目的

本研究は、古典期におけるマケドニア王国の発展とフィリポス2世によるギリシア制覇の諸相を、マケドニア史の「連続性」を重視しつつ、長期的な枠組みのなかで多角的に解明することを目的とする。フィリポス2世のギリシア制覇に至るマケドニア王国の発展を、古典期におけるマケドニアとギリシア世界の関係史のなかに位置づけること、マケドニアの社会変容と関連づけてフィリポス2世のギリシア制覇の過程を分析すること、そして、フィリポス2世研究においていまだ根強いアテナイ中心主義を脱却し、マケドニア側の視点に立つことを課題とした。

具体的には、(1)前5世紀初頭以降のギリシア世界の勢力地図におけるマケドニアの位置の変遷をきめ細かく検証し、マケドニアの発展をギリシア世界との緊密な関係史のなかに的確に位置づけることによって、マケドニアの台頭の諸要因を検討すること、(2)フィリポス2世のもとでのマケドニアの急速な台頭とギリシア制覇の過程を、彼が進めた軍制改革・都市建設・人口移動・農地開拓などによる社会の変容と関連づけて分析すること、(3)フィリポス2世が前王たちから何を継承して、それらをどのように活用し、何を新たに付け加えたのかを明らかにすること、(4)そのうえで、なぜフィリポス2世はそれまで誰も成し遂げられなかったギリシア制覇に成功したのか、というこれまで多くの学者たちが論じてきたもののいまだコンセンサスのない問題を、マケドニア史の「連続性」という観点から考察することをめざした。

## 3. 研究の方法

(1) 21世紀に入って一層活況を呈しているマケドニア史研究の動向を、近年のアイガイ・ペラの発掘成果も含め、あらためて整理した。とくに古代マケドニアの言語やエスニシティの問題は、マケドニア国名論争を焦点とする現代の「マケドニア問題」と深く絡み合っているため、そうした現代のバルカンの

国際政治が研究に及ぼす影響に留意しつつ整理作業を進めた。

(2) 前5世紀初頭以降のギリシア世界の勢力地図におけるマケドニアの位置の変化を検証し、マケドニアの台頭の諸要因について考察した。

(3) デモステネスとアイスキネスの弁論、およびテオポンポスの断片をはじめとするフィリポス2世のギリシア制覇についての同時代史料を慎重に読み解く作業を進め、ギリシアの諸地域におけるフィリポス2世の政策および勢力浸透の過程を史料に即して丹念に分析した。

(4) フィリポス2世が進めた軍制改革・都市建設・人口移動・農地開拓などの過程を分析し、彼の治世においてマケドニア王国の社会がいかに変容したかを考察した。

(5) マケドニア王の神格化・神的崇拜の問題についての考察を行い、アレクサンドロスの神格化の「前例」とされるアミュンタス3世とフィリポス2世の事例を検討した。

(6) マケドニア史の「連続性」、ギリシア世界との緊密な関係史、マケドニア社会の変容といった論点を重視しつつ、フィリポス2世のギリシア制覇を可能にした要因について考察した。

#### 4. 研究成果

(1) 前5世紀のアレクサンドロス1世・ペルディッカス2世・アルケラオスの治世におけるマケドニアとギリシア世界の関係史を、古典史料・碑文史料に即して検討した。王が実権を握っていたマケドニアの木材交易と「ギリシア化」政策の様相を各王の治世ごとに分析し、ペルシア戦争からペロポネソス戦争へと至る前5世紀のギリシア世界の勢力地図

において、マケドニアの位置・比重がそうした政策に応じて変化したことを検証した。

(2) 従来はマケドニアの低迷期と見なされていたペルディッカス3世の治世（前365～360/59年）について重点的な検討を行い、この時期におけるマケドニア国内の状況とギリシア世界との関係を古典史料・貨幣資料から分析した。そうした分析から、経済的な復興が見られ、軍制改革もスタートしたこの数年間、その後即位するフィリポス2世のもとでの急速な国力増強の基盤になっていたことを明らかにし、従来看過されてきたペルディッカス3世の治世の重要性と、続くフィリポス2世の治世への「連続性」を検証した。

(3) フィリポス2世のギリシア制覇の過程を、デモステネス・アイスキネス・テオポンポスなどの同時代史料の分析から慎重に跡づけるとともに、多方面への征服活動と並行して進展したマケドニア王国の社会変容について考察した。マケドニア王国の急速な台頭の背景となったフィリポス2世の富国強兵策について、従来の諸研究がテーマとしてきた軍制改革そのものではなく、軍制改革とその後の軍の飛躍的な拡充を可能とした社会的条件に焦点をしばり、フィリポス2世による都市建設・人口移動・農地開拓などのプロセスを可能な限り時系列に沿って明らかにし、マケドニア王国の社会が彼の治世にいかに変容したのかを跡づけた。従来、フィリポス2世のギリシア征服の順調かつ円滑な進展は彼自身の巧みな外交手腕に帰せられてきたが、征服活動と同時に進められた彼の社会改革がその重要な背景になっていたことを検証した。

(4) 当初の研究計画に沿ったこれらの課題と並行し、マケドニア王の権力のあり方を考

察する一助として、先行研究の少ないアレクサンドロス以前のマケドニア王の神格化・神的崇拜の問題について検討した。ヘレニズム時代の君主礼拝やローマの皇帝礼拝の起源とされるアレクサンドロスの神格化については膨大な研究があるが、そのアレクサンドロスの「前例」とも言えるアミュンタス3世とフィリポス2世の事例についての考察を行った。アミュンタス3世の事例は史料的制約から不明な点が多いが、フィリポス2世に与えられた宗教性を帯びた破格の榮譽は、いずれも明確な神的崇拜ではないにせよ、スパルタのブラシダスやリュサンドロスの事例から明らかな外部権力者への「へつらい」としてのギリシア世界の都市祭祀の発展に大きく寄与するものであったことを明らかにした。こうした現象も、フィリポス2世のギリシア制覇の過程で重要な意味を有していたと考えられるが、それを論証するのは今後の課題である。

(5) 以上の考察を踏まえて、なぜフィリポス2世はそれまで誰も成し遂げられなかったギリシア制覇に成功したのかという問題を、マケドニア史の「連続性」とマケドニア社会の変容という2つの視点から考察した。フィリポス2世がギリシア制覇に成功した主たる理由としては、従来、マケドニアという国が持つポテンシャル、フィリポス2世個人の力量、ギリシア世界の状況、の3点が挙げられている。かつて重視されていたの要因（ギリシアの「衰退」）に代わり、近年は、マケドニア史研究の隆盛にともなって、の要因が強調される傾向が強く、とりわけ、フィリポス2世の評価が著しく高まるなかで の要因が過大視されることが多い。本研究で検討したように、フィリポス2世がマケドニアに大きな社会変容をもたらし、それが彼のギリシア制覇の原動力になったことは確かであり、これも の要因の重要性を裏

付けるものであるが、そうした社会変容を短時間で成功させることを可能にした背景として、前5世紀のマケドニア王たちや前王ベルディッカス3世からの「継承」というファクターも、従来考えられているより重要であったと言える。

マケドニア史の「連続性」という観点からフィリポス2世のギリシア制覇にアプローチした本研究の成果は、アレクサンドロスを終着点とする連続的なマケドニア史を構築するための重要な土台となるものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

澤田典子、「プルタルコスとアレクサンドロス」、西洋古典叢書月報、査読無、114、2015、pp. 2-5

澤田典子、「回顧と展望：古代ギリシア」、史学雑誌、査読無、第126編第5号、2017、pp. 313-317

〔図書〕(計1件)

G. Martin ed., Oxford University Press, *The Oxford Handbook of Demosthenes*, 2017 (forthcoming), Chap. 26

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤田 典子 (SAWADA, Noriko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：50311650